梅花道人著

新體梅花詩集

全

東京博文館藏版

HAKUBUNKAN
TOKIO
東京博文館
發兌

中西梅花道人著

新體梅花詩集 全

東京 博文館藏版

中西梅花道人著

新體梅花詩集 全

東京 博文館藏版

新體梅花詩集題言

「いかゐる形よもあれ、永く活きて働くべきことをいふぞ若き詩人の務ゐる。物よさからふ心、ものをきらふこゝろ、ものを謗ることゝろ、若くいものを打消すのみゐることい努こと葉よあらむすことゐかれ。そい何の益もゐからむ。」

「よが友とする若き人々よわれ今切よ勸めむとす、人々のおの〳〵その身の上をおもむことを。詩のゑらべ少しとゝの

ひたらば、これのみまて其意いよ〳〵善くおりぬへし。」

「詩の含めるものい、即是詩人の世のふくめるものおり。そい誰もえ奪むず、たれもえ縮めず、唯おほひて暗からしむることあるべきのみ。底事まよらず、影をかへりみてみづから喜ぶやうなることを本としたるい、わが取らざるところおり。」

「思を舒べてかくすことおきい、人あおづりするま近し。そいかゝるとき誰もみづ

から堪ふといへど、まことといえ堪へねばおまを。我友とをる人々まわれ今いいむ。君等い守るべき法度あるまあらず、法度い君等かみづから作るべきものおを、唯一詩成らばかおらずその含めるこゝろおのが經歷まを来れるかと問へ、またその經歷おのが道を進めたるかをと問へ。譬へばわかれし戀人、われをすてし戀人、若くいをまかをしこひ人をいつまでもこふるい、道を進むべきことまあらず。かゝ

る事をよみいでたるい、言葉いかゝ巧ゐゑといへども、何の益かあらむ。」

「詩人いわが世とゝもゝその言の葉のすすまむことをつとめよ。かくつとむるときい、いつゝても直ちゝおのかこゝろの活動したゑや活動したらむやを知らむ、また後ゝおもいゞ、いつゝてもおのがこゝろの活動したりしや活動したらざゑしやを知らむ。」

この法を説きしい大詩人ギヨオテあゑ。

これを寫して梅花詩集の題言としたるい鷗外漁史森林太郎あゑ。

明治二十四年一月中澣。

梅花詩集序

梅花道人昨秋飄然京を出て美濃尾張の野に彷徨し遂に虎谿の精舍に寓すること數旬乃ち歸りて梅花詩集を印行す

道人の京を出るや資斧窮乏備さに艱苦を嘗む途中書を友人露伴子に寄す露伴子一讀墮淚涔々覺えず放聲大哭せんと欲せりと云ふ

道人歸て余を根岸の寓に枉訪す温然たる其容渾然たる其言殆と復た故の善憤善罵高聲四壁を動かすの道人にあらず余に語て曰く余か此遊實に人間の

逆境を閲盡せり余是より於て順境に在る者か未た人間の真相の十一をも窺はさる者かるを悟りたりと余對て曰く然り然れとも往時の兄の如きは則順逆を以て言ふべきはあらもを強て其居りし所を名つけは其變境乎

都下文を以て鳴るの士十百人而して概ね皆道人を敬し道人を愛し道人を禮遇款待せざる者希れかり則ち能く道人を知らざる者希れかり道人當時或は思へるからん人間總て是の如きのみと嗚呼人間豈是の如きものからんや人間は已れを知らざる者の

群團かり偶ま已れを知る者あらは僥倖のみ不思議のみ道人平生知已者は容れらるゝの變境は居り自ら視て常とかを而かも不知已者は容れられざるの常たるを知らざりしかり茲は旅客有り囊は半錢無し空手徒歩以て百里の路を行かんと欲を食を求むるに處無く寢は就くは地無し疲憊困頓進退殆と谷まる是れ人間の當然かり道人獨り此を以て當然からもと爲し能く空手徒歩以て百里の路を行くべしと爲し檜笠一頂飄然として途に上れり豈其の變境を以て常とかし江湖隨處知已者ありと信ずたるは

由るまあらずや
今や道人い既まに自ら往時の變境を悟れり人間の真相を窺へり其の詩眼の俄まに幾等を進めたるや断じて疑を容れざるなり
曩まに道人嘗て諸子と會飲し醉て莊子を快誦を音吐厲揚一世を叱咤をるの概あり何ぞ其壯なるや後未だ旬月おらざ單身煢々荒村破驛まに漂零し山寺を敲て一宵の宿を乞ふまに至る何ぞ其悲しきや然れとも若し道人を玉成し梅花詩集をして永く芬芳を藝園まに流さしむる所以を求めい彼まに在らざしして此まに在

らん

辛卯一月廿二日報知社まて

思軒居士撰

梅花道人突如として、國民新聞編輯局より来り、余に一揖して曰く、君未だ梅花詩集の序を草せざる乎、余笑て曰く然り、頃報知新聞に於て、思軒居士の君が集に序を るを見る、余か謂いんと欲をる所、謂ひ盡して餘蘊なし、余又蛇足を添る能わざるあり、道人曰く然りと雖君既に宿約あり、請ふ一言せよ

余曰已むかくんぬ則説あり、君自から奇骨を負ふ、飄蕩清逸、天馬空を行き、尋常規

矩を以て律を可らさるものあり、然とも其の私を察をれい、小心翼々、性情流露、一片の天真得て掩ふ可らさるものあり、以て李太伯の詩に比を可し、若し他日識進み學熟し、之に加るに堅忍不拔の精神充實あるに到らい、杜律の森嚴精美得て期を可し、而して更らに加ふるに天を敬ち、人を愛し、職分を重んド、品性を修め、詩腸以て宇宙を呑むに到らい、則ちミルトンの崇高典麗得て望む可し、造詣此の如し、

豈に獨り詩品をのみ云いん哉

君哄然として曰く、多言をる勿れ、天機漏らを可らず、乃ち記して序言と爲を

明治二十四年二月下旬

蘇峰生

自序

新體梅花詩集印刷成る。自序何かものせんと思ひたれど、書くべきほどの事更ゝ無し。這般の詩ゝ就て己、考へしことども無きゝあらねど、其い別ゝ述るところあるべし、故ゝ今い言いで。座右偶、愛鶴軒所藏鬼貫の獨語あり、よく若き詩人の病を箴しぬ。其一二節を爰ゝ移して自序ゝ代ふるい、千朶山房主人か本集ゝ題せられし顰ゝ倣いんとゝいあらねど、又自ら誡

むるところ無くんいあらずかし。

俳諧をする人あらましまも云ひこかせば、はや得たり顔まに止まるあり、無下まほいかくぞ侍る。或時い句もありやをきやうまに覺え、又或時いひたをら成りがたくもかり侍らん事、幾かいりも有ぬべし、深く入かん人い其程〳〵まに功つもりて猶むつかしき事を覺侍らん、修行の道まかぎりあらざれい、至りて止まる與もあらじ。只臨終の夕まて

の修行と知べし。たとへい宗祇法師い連歌の達人まして、余まからへる人も無しといいへど、祇公ひとりの上まい、今五とせね給いゝ五年の功、十とせかがらへたまいゝ十年の功も有べき事まおそ。

又曰く。

聞えぬと云ふ句まは、幽玄と不首尾の差別侍り。まおとを辨へぬ人のさま〳〵句を作りて、是までも未た聞へ過てお

もしろからじと、ひたぬきまゝ詞を拔て後まゝ、何の事とも聞えぬ句まゝかり侍れど、作者ゝ初一念の趣向を心まゝ忘れ侍らねば、我のみ獨り聞ゆるまゝまかせていひゝろむるもかた腹いたし。又幽玄の句ゝつたかき心をもて其意味のおもしろさところを聞得ぬかるへし。

讀去りて已、影をかへりみぬ、味ふべき詞からずや。

鬼貫ゝ上島氏惣兵衛、松江維舟の門まゝ出

でゝ檀林を吟し、一風を起して世まゝ鳴る。伊丹派の祖師かり。

明治二十四年重三の節句

落花村舍主人

漂絮ゑるを

新體梅花詩集目錄

○

○九十九の蝦　一頁
○滴々露　三十七頁
○靜御前　四十二頁
○毒湛禪師を辭し虎溪山を出るとて　四十七頁
○松壽軒西鶴の畫像に賛をるとて　四十九頁
○墨川白鷗の詞四首　五十頁
○對空吟　五十六頁
○戯れに露伴子と韻を探りし折柄己ア、エの兩

列を得しかば二首　五十七頁
○江戸紫より題を　五十九頁
○春の舎主人　六十頁
○竹の舎主人三首　六十二頁
○鷗外漁史　六十四頁
○古蒼樓主人　六十六頁
○靈魂　六十八頁
○出放題　八十一頁
○旅烏　九十二頁
○須磨の月夜　九十五頁
○李青蓮が菩薩蠻の意を譯を　九十八頁

○おなじく柳永が卜算子慢を　九十九頁
○原作者の名を失を二首　百一頁
○米偃子の西京より行れしと聞き想鴨河納涼より走せて　百二頁
○浦のとまや　百三頁

以上

新體梅花詩集

梅花道人著

九十九の嫗

其一

息されぬ、歩むに腰のほね痛し、
杖もがな、ア、杖もがな、
竹にもあれ、木にもあれ、
手頃の棒のほしさことよ、
こゝらの里に小供は居ぬか、
居らぬと見える、

居らば遊ぶに良き場所なるに、
遊ばゝ子供のつねとして、
棒ちぎり、履わらじ、
取りちらしあるは必定、
アヽ、棒もの哉、杖ほしや」
ホヽ、笑止や、
昔は杖と云ふものを、
老たる人の曳かるゝに、
今の我身が是ほどに、
用ある物とは知ずして、
母なる人の秘られて、

祖父なる人の秘られし、
あづさの弓のホヽ、
我身ながら
笑止のことや、
腰の曲りしありさまの、
其の弓にしも似たるかな」
其の弓折れの杖をしも、
ねだりしに〳〵、
父なる人に去られて、
炙に辛き目見せられしが
母なる人のいましめて、

弓は女子の持ものならし、
をのこぐならば
得させもせめと、
アヽ、我身
をの子なりせば」

其二

慨くまじきことよ、
我身ものにくるへりと、
さとの子供に難さるゝは、
ものを一途に思へばぞ、
おちぶれし、

今日を、
昨日に比べては、
明日を如何と突詰めて、
心を思ひにかきみだせば、
眼に時ならぬ花咲きて、
耳はつぐみのうつゝとも、
夢とも分かで、浮き橋を、
たどれるが如、まぼろしに、
去ばしは我を忘れはて、
フト心づき見かへれば、
そぞろの衣の脛あらは、

髪はおどろにあさの葉の、
いさ葉の疵の隙間なく、
あるは、
入相の鐘に花も次第、黒みて、
人はおぼろ、
影を地に曳くの夕月、
柳、瞻る空に光おさまりて、
静かなる草屋根のこなた、
あるは、いづこ、
藻鹽焼く蜑の苫屋に月さえて、
夜さむの風に鳴く千鳥の、

聲さびしき浦は、
寄せてはかへす波の音に、
心もさわぐ群松の、
影をみづからかへり見て、
只、ちよんぼりと躇むのみ」

其三

過去りて今日、
僅に昨日と數ふれば、
百年も、また夢なれど、
歩み来りて立ちどまり、
あの山、この野、と眺むれば、

千里も霧の一重なれど、
憂さに月日をかぞへては、
つらさに浮世を送りては、
人の見て面白しと云ふなる月も、
我は、あはれ、
心を照す鏡ともなれや、
さらば、此苦をうつさせて、
憂をなぐさむ友ともせんに、
人の見て面白しと云なる花も、
我は、あはれ、
我身此の花ともなれや、

さらば夜半の嵐にくだかれて、
ふたゝび原の根にぞ歸らん、
願ふは我を此の花にと、
ゆく心、眼にたがへば、
などで樂と見らるべき」
アヽ、アヽ、我身若し、
昔ながらの滋賀の里、
浄行寺門前に、
細くあげたる煙にふすび、
氏なきものゝ娘にて、
花賣爺の子と呼ばれ、

其のまゝ其處に埋れなば、
アレ〳〵、彼方を三五人、
脚半の泥もからびしまゝ、
つまをり笠をわきばさみ、
おち穂片手に稻扱かたげ、
苦と云ふものゝ世の中に、
有としも知らぬ高笑ひ、
あぜのほそみち傳ひ行く、
仲間となりて世を安く、
そらは夕陽のさかづきに、
酒を過せしほろよひを、

紅葉にゆづりゆふばえて、
見渡すかぎりあか〳〵と、
照れる名殘もいまいはや、
人影ながくやまのはの、
鳥もねぐらにこゑたえて、
そよとの風も肌さむふ、
むしの音さびしき誰彼時、
脊戸の榎にやどを貸す、
旅のからすにおくられて、
我も家路をいそぎつゝ、
風呂に疲れをながしては、

良人が寐酒の二合半を、
月のあかりにさしさゝれ、
醉へば其のまゝひぢ枕、
障子も立てず、戸も繰らず、
かろきうき世を五十年、
柳よくらして
仕舞ひしものを」

其四

ものずきな、
ヱヽ、ものずきな、
姫なら二人、

をの子なら、
三人の富をたもちつゝ、
月よも、花よも、不足なく、
榮花よおはす御身よて、
ヱヽ、ものずきな、
滋賀山寺よものの詣ふで、
げかうの道のかへるさよ、
五、を二のふり分けがみ、
寺のつい地のいしがきよ、
花を刻みてまゝごとの、
餘念をわすれし幼き者を、

父母よねだりて養てれ、
エヽ、ものずきな、
思へば恨みの大江様」
ホヽ、笑止、
我身、ものよ狂へりと、
里の小供よもやさるゝね、
一途よものを思へばぞ、
かゝる時、
一途よものを、思へばぞ、
身を空蟬の現つなく、
もぬけの殼と成り果るね、

ものを一途よ思へばぞ、
大江家よ、我身、
何の恨みの、あるべきや」

其五

屋根やぶれてゐ、
軒のたる木を月漏りて、
かべくづれてゐ、
ねだのたき板風透きて、
夏あつく、冬さむき、
土生の小屋よ、生れしものを、
過世よ結びし赤縄とて、

永のとしつきやしなれ、
實の御子も羨やむまで、
昨日のつゞれ今日いまた、
紗也ゑ綸子ゑ晴れ模様、
をとりも之ゑあやかりて、
齡ひもいとゞ長かれと、
むすびてたびし真紅なる、
オヽ、言葉も辛苦ゑ、
ひゞかれて、
今さら思へば
忌てしけれど、

其の折ゝ〳〵、
嬉しくおめし名古屋帶、
されど、我身ゝ幼なくて、
心ゑ懲のあらざれば、
只、ちゝはゝゑ近江路や、
滋賀の古里戀ひしさゑ、
袖のたもとをかみおめて、
まなこゑ露を絶さねば、
なぐさめて
御夫婦の、
見もなれもせぬ美しき、

手遊びものゝあやされつ、
次第ゝなるれば幼氣い、
染められやすきしら糸の、
いともたふとき父母を、
昨夜のゆめのおぼろ氣ゝ、
心のそこゝ忘がくのみ、
疎くなるまゝ遠ざかり、
我身い其家ゝおひ立て、
只、いとたけゝ日を暮し、
ねふりのひまさへ
惜みしが、

思へば、
オヽ、其の時よ」

其六

恥かしや、我、
今い乞食とおちぶれて、
御手洗の、
古き手拭をつぐくりて、
垢ゝ染めたるいろ〳〵衣、
菅の小笠もあめゝ洒落、
骨のみたかく、肉こけて、
齒なみも斯くい

まばらまくづれ、
かしらまゐ雪、
まゆまゐ霜、
まなこゐ煙霞まとざされて、
髪の毛つくもまむすぼうれ、
膝ゐよたくて、
腰くねり、
一日ま一里もむづかしき、
鬼のひぼしのからびうば、
むかし思へば皺みたる、
背まも汗の、

はづかしや」

其七

思ひ出づれば、今ゐはや、
むかし話しとなりしよな、
曽根中将の、たゞ一騎、
處も、處、嵯峨のおく、
折も、折とて、秋の最中、
庭もせま虫の音淋しき
ゆふまぐれ、
ひねもすのもみぢ狩ま
つかれさせ、

水、一口と立ち寄れば、
雲いやぶれて差し出づる、
月のかつらの大井川、
光りながれてきしを打つ、
涙よも似たるかり衣の、
あをきおんぞの影透けど、
我身い誰ともしら綾の、
かさね小袖もけふさのふ、
萩の葉風のをぐしさよ、
小簾垂れ籠めて琴とうで、
ホ、はづかしの繰言よ、

其の時なりし中將さま、
我身のことよようでうを、
こしよりぬいて平調よ、
合すおらべのさうふれん、
かなで終りて、うつふかれ、
我い只、
雲井より、
雁のたまづさ賜とりて、
おほみづかひの、仲國が、
峯のかへでを打ながめ、
只、打ながめて手折れぬ、

其の様まも似たる哉と、
暫しことばの途切れしま、
我身いいとゞ次なくて、
はぢらひながら立ち様ま、
かへらひ見れゞひと雫、
はらりと大人がさし貫ま、
抜かれしい抑も、
今ま〳〵、
我身まどてす、
もとゝいなりぬ、
左りとて我身い

大人を戀ひてい居もせぬま、
只、忘れぬい其折ま、
大人が落せしおらたまい、
露か、涙か、露ならゞ、
清らまさえしかたさまが、
月まも似たる眼の中の、
かつらの花のしたゝりか、
左もあらゞあれや、
我身、其の後い、
只、其の涙ま心をくださぬ、
いかな〳〵、

左りとて戀ひてい、
居もせぬよ、
ホヽ、をかしき心の我身哉」

其八

オヽ、猶思ひ出づる事こそあれ、
今宵のごときゆふ闇よ、
風ものすごき夜半なりし、
貝掩の催ほしありて、
大江の家のうからやから、
打つどひ来て興ぜし折、
大人もまた

まねがれて、
オヽ、其の夜半の事なりし、
我身の歌をほめられて、
我身の琴をほめられて、
うもれ木の
深山のおくよ老ひ朽て、
花を此の世よ咲かせぬい、
咲かせぬ事のなどあるべきと、
大宮づかへのおんうよさ、
繰りかへしてのお物語、
我身のこゝろの動きしを、

さらでもと、
かねて内意の大江家ゑ、
たのむの雁の
おりてやゐけん、
我身も源氏ゑ、狹衣ゑ、
ふりし昔をなつかしみ
御簾をへだてゝ大内の、
おんかげ言をきくゑつけ、
行きてみましの秋の川、
末のながれゝうきくさの、
今日あらんとゝ思ひきや、

ヱヽ、悔ひてせんなき
世のありさま、
浮世のはてを皆小町とゝ、
あきらめ無しをあきらめた
無理をまことの云ひ草か」

其九

肌さむうなるゑつけ、
ひだるくなりぬ
いづこゑ煮る夕粲の菜ぞ、
味噌汁の小氣味よげなる
かほりかな、

エヽ、羨しのしよくものや、
昔なりせば我、
桂もて、玉を炊ぐも、
奢れるとゝ知らざりしよ、
今ゝ人のあまれるをだよ、
まゝならぬとゝ」
アヽ、我身、
大江の家の退轉せど、
三位の君よおくれぎば、
此のさまままでゝ、
落ちざらまじを、

てもさても、人の世の
常なきことよ」
さしもよ榮えし大江家も、
兵火よかゝりし其後ゝ、
つい地よのこる白梅を、
僅よかた見と止めしのみ、
春もむかしの春ならねば、
何をよすがよたのまんや」

其十

アヽ、アヽ、アヽ、
やまにらの葉よ置露ゝ、

消なばふたゝび結ぶべし、
かたふく月も来ん秋い、
また此峯ゝとたのしめど、
零ちて碎けし人の身い、
鳥部のやまのゆふけぶり、
立ちさらば又
何時かこのへらん」
逢ひがたき御世ゝ出で、
受けかたき人とうまれ、
過世の如何ゝ惡ければ、
若し後の世ゝ鳥とならば、

空ゝも翼をかゝすべく、
木とも草とも生れんゝい、
枝をも葉をも交さんと、
まことを契るいもとせの、
袖すれ合ふを縁ゝして、
はなしの口をこゝゝ切る、
道行く人のこゝろもて、
鴛鴦のふすまを分るてふ、
甲斐がねゝ立つ白雲の、
こゝろへだてし良人を持、
たがひゝ其れと梔子の、

云いねどうさい色ゑ出で、
世を味氣なく
身をはかなみ、
九夏三伏の夏の夜も、
氷をいだく思ひまて、
かてをまくらい沖の石、
潮ゑひたりて、幾年ぞ、
エヽ、思ひ出すも
口惜しけれ」

其十一

オヽ、今日通り来し道ぢたゑ、

鳥をおどせし報ゑて、
鳴子い、いのちの繩ちぎれ、
案山子い、命のゆづる切れ、
今い世をあきの田ゑ
捨てられぬ、
此れ彼れ思ひ合すゑも、
我をおもひし其の人を、
思てぬ罪のむくひ来て、
我身も斯くい世のなかゑ、
捨てられ果しゑけなるか、
つまらぬ浮世ゑ存生て、

はぢを人目ゴ晒さんより、
晒さんよりいと思へども、
流石ゴ命のをしまれて、
枝よりかげも曳きかねつ、
川ゴもこゑを飛むしかね、
今ハ六十路を小動ぎの、
いそがぬ旅ゴとしなみの、
寄せて返してまてがひの、
今日が日までをうか〳〵と、
潮ゴつられしうとましさよ」
死んで仕舞と念ぜれど

死なれぬことこそ、
オヽ、恨みなれ」

滴々露

くさ葺の〳〵、軒ゴにほへる干梅の暑を包、
みあからみて、ほやり〳〵と吹きさる、ぬ
るみし夏のほあり風、さをがゴ驕るひる顔
も、耳あふられて芽もえほれ、花ひしげ行く
田舎道、」
見渡せば、
蒼きものゝあらゆるハ、

みか俛首ておともなく、
只あかねさす紅日の、
鎔、爐のごとく火を吐ば、
山や、野や、草や、木や、
なべてゝ爲ゝ燒焦げつ、
其のさまを咲く百日紅、
幹ゝましばゝ花燃えて、
打ち煙り、また打ち霞む、
春の野ゝしていと遊か、
立つ陽炎のゆらめきゝ、
往来の人のかげ絶えて、

世間ゝ沈みゝ靜まりぬ、」
川、若干邑をよぎりて草鞋ゝ、
山路の幾里のぼり行けば、
時しもあれや、どや〳〵と、
懸崖よりさゞれのまろぶが如く、小高き丘
を馳け下りし、里のうなゐの一とむれゝ、蟬
黏を竿を投げをてゝ巖ゝむせぶ谿川の瀧
なす流れきよらけく、芭蕉の葉かげ露滴る
ゝ、其の碧苔をたかむしろ、倒れ轉びつ餘念
なく、さゞめき合ふて戯れぬ、」
爰ゝしも、爰ゝしも、

山のそがひの奥ふかく、
浮世より遠き境なれば、
むら立つ梢にあやを織り、
うづ巻く水にもんを踏む、
霧いとしげく立ておめて、
里にはるかに山いく重
降りぬる雲の彼方に消つ、」
さればよや、谷吹きおろす青嵐、含めば歯牙
も凍るべく、掬べば肌にあは飯を、炊ぐ間は
かな幻のゆめの現、に遊びにし、
其の旅人と、我もまさ、

なりにけらしを、」
折からに、
草いきれ、浮世を叫ぐ馬追の、
馬やらひ来つ此のさまに、羨む心や出にけ
ん、馬をみぎはに手綱を岩に、身もまさ汗を
流に清め、石を敷寝に合歓の下、
うたてと許り、うたゝねの、
脇をまくらに、耳近く、
夢を洗へる一と休み、」
心に如何なる空に舞ふらん、
眠れ馬追ひ、汝が心のまゝに、

アヽ、餓て啖ひ渇して飲む、
帝の力、我ゝ何かあらんとぞ云ふ、
神代ながらの其の風情、」
おもしろや〳〵、
汝おそ我ゝ道の師ぞ、
枝折も床し里の子よ、
アヽ、したはしの馬追や、」

静御前

舞へとあらば、舞ふても見せん、左り乍ら、思へば〳〵鎌倉殿、」

故左馬の君も見そなはせ、言よかしとてさかしらを、迎へて已が血を分し判官殿をうらめしや、何くを端としら河の關のあなたゝ忍びゝし、まだ其のみかいたいけな、裳屋ゝあげたる初聲の、浮世のあやゝ罪も無き、少人ゝまで祟るとは、思へば〳〵鎌倉殿、」怨みおそあれ恩も無きゝ、暮れ行く春の徒然を、妾の舞ゝあそばんとは、不敵の人の心哉、知らずや如何ゝ殿原よ、妾、都ゝさふらふて、内侍所ゝ召さるゝも、雲上人ゝはやされて、始めてかへす舞の袖、なさけゝはゝ歌ふ曲

もあれ、力をかりておしつけの、思へば〳〵
鎌倉殿、」
妾を女子とあなづりて、手弱きものとさげ
をみて憂さを見せんづ心なら、よし〳〵妾
よおもわくあり、判官殿と朝な夕な巫山雲
雨のむつ言を舞よこことよせはやさせて、坂
東武者を法樂よ、なぶり呉れんとけなげよ
も、靜其の日の打扮い、」
薄化粧、眉ほそやかよつくりなし、白き小袖
よ唐綾かさね、精好の袴ふみしだき、割菱縫
ふたる水干よ、黒髪さツと振分て、舞ふや霓

裳羽衣の曲、みな紅の扇より、ひらめく蝶の
羽輕く、」
時しも頃い衣更の〳〵、青葉の木陰風渡り
磯吹く浪のおだやかよ塵もあげざる若宮
の、神の玉垣ひまも無く、之を見んとて居並
びし、人の氣色い星月夜、鎌倉山といまおと
なれ、」
靜い舞曲よ意をおめて、問いれずも〳〵、語
らまほしき身の素性、一年都の旱魃の、蟬の
小川よ水絶えて、四民のなげき左おそぶと、
院の御幸よ召出され、神泉苑の御池よて、雨

を祈りの舞の時、判官殿ゝ戀慕められ、其のまゝなれて堀川の、御所ゝ此身ハ世を安く、柳ゝのびる春の日も、花ゝ暮るゝを啼ちしが、思へばかなし兄弟の、靜けき海ゝ浪立て吉野の山のやまふかく、入ゝし君の其のきみの、跡をたはしや白旗の、神もあハれと見そなゝし、倭文の小田巻操りかへし、昔を今ゝ此の舞を、豫州も共ゝ兄上と、御座分たるゝことあらば、如何ゝ樂しき事ならん〳〵と、舞ひおさめたる其の風情、鬼ともくまんづむくつけき、坂東武者の腸ハ、斷れてこそ

ハ見えゝけれ、」

毒湛禪師を辭し虎溪山を出るとて

深しさぎりのさきの暗さゝ、
首ををぼめて眼路たどれば、
道行く人のかげハおぼろゝ、
有ハ無き身のかげ法師とて、
此の世を何のしら炭が句ハ、
樂をかたちの有無ゝ忘れつ、
只、其のまゝのさまを詠じて、
偖ハやを〳〵死ゝけるよお、」

萍草のひかしにし、稻妻のあをあをさ、
　たゞよへど我、根無きまあらず、
蹣跚とはるゐ嗟嵯、逍遙とあきゐ須磨、
　さまよへど我、家無きまあらず、
ねゐ、共音啼くはま千鳥、
　飛び去りて空まあと無し、
云ゐ、われままた何事を、
　四大原是幻、五陰本來空なるを、」
　咄、
看來れば畢竟明月蘆花まに入る、
　非も無く、是も無し、

左るを我、ア、何事ぞ、
　心がら追いれぬまに跳ねし稻子哉、」

松壽軒西鶴の畫像まに贊するとて

日蔭のかつら三葉四葉まに、
　空をさつきのひた繁りつゝ、
代ゐ菡さす日、其あふひの豐逆上るがごと、
代ゐ德川の水、其まみづの彌澄渡るがごと、
　さほひまさほひ治り行けど、
　かぶみ鞍、足さがむものゝふまに、
花をあいれむかみだ無く、

ちらま弓、手巻るまきをらをに、
鳥をかなしむなさけ無し、
はる霞、たつさの櫻、いたづらに咲き、
更科や、うばをての月、むなしく照す、
されば、
言葉のはやし風立ちて、
硯のうみに浪荒れぬ、
時しもあれや難波津の
虚空に高く鶴舞ふて、
聲に叩く廣寒宮、
いそのかみ、古よし世まで、

はたゝきに響く閻王廳、
天津おとめ、下れる世まで、
筆につばさに似て、かけり至らぬくまも無く、
想ひおほそらのごと、つゝみて容ぬ物も無し、
句を吐て二萬三千、
住吉の神もおどろきぬ、
汝が書き捨ての浮世草紙、
香りに今よいとゞめでたし、」

墨川白鷗の詞

其一　富士　少列

ふゝべりあらふ、月ををくひつ、
いよ簾もりくる、風よねふらむ、
かまめなく、〳〵
掏うふ、
捕うふ、
追へども去らで、
笛のみ只、不時のねりやうりやう、

其二　筑波　オ列

さら、さらしなの月ならなくも、
そよ、そよとたつ此さゞなみを、

かまめ飛ぞ、〳〵
妹も来よ、
弟も来よ、
呼べどきたらぎ、
鐘のみ只、つくば山、とゞろとゞろ、

其三　墨川　イ列

柳ゆらめけば、つきかげあをみ、
風そよふけば、なみをとさむし、
みやこどり、〳〵
誰を、まつち、

何、いほざき、
問へど、こたへぞ、
水のみ只、をみだ川、だう〳〵たり、

其四　綾瀬

もやひ切れたる捨られ小舟、
捨られ小舟、
あなた、こなたへ、ゆらり、くらりと」
てもさても、如何なれば我、
身をうき草の根をたえて、
ゆう汐みてば、岸ま添ひ、

あさ風たてば、浪ま醉ひ、
只、鳥の巣の浮き沈み」
喃、船人こげや〳〵、
よし、あしの葉の角芽かきわけ、
かまめと共ま、いざみなかみへ、
漕いで武陵のはるならねども、
こゝろの綾瀬、ねふもひらくと、
秦をのがれしひとまも逢ふて、
ひとまも逢ふて」
問いなむかしの、こゝの渡りま、
其のなり平の歌よみしふぜい」

對空吟

ねふる柳よ、つばめくるへば、
　　啼くうぐひすよ梅香を送る、
汝ハ抑も知らでなさけ無きか、
浮世ハつひよ斯くもあるべし、
何ぞや、我ハ其を忘れたる、」
花をさぐりて、みちよまよへば、
　　行方を鎖ざすかをみ憎らし、
汝ハ抑も知らでなさけ無きか、
浮世ハつひよ斯くもあるべし、

何ぞや、我ハ其を忘れたる、」
覺ませ、汝が香よ迷ふ心を、
　　斷ん、吾もゆめよ畫く其の影を、」

戯れよ露伴子と韻を探りし折柄已ア、エ、
　　の兩列を得しかば
錢あらばいだせよ、肉買うハ、
　　酒のつかひハ、早かへり来ん、
敢立つ浪よ、藻がたぞよへば、
　　そよげる風よ、はなも亂れた、
富貴も捨てゝ無何有のさと、

貧賤もわすれて藐姑射の山、
見たまへ世ハ何かうた形の、
きえつ、結びつ、あらおも白や、

○

まツ斯の如し切るかたなで、
君のそばへハ、うかり寄れね、
月脱れおどれよ、忍ばぎよ、
花咲けば舞へよ、墨田の河邊、
たをも〳〵、たなのだるま、
むしるも〳〵、はるのわかめ、
世をしら露の伴とおもハゞ、

四角なことハ兎角よしやれ、

江戸紫よ題を

むらさき、むらさき、江戸紫、
昔ハたへ荒栲の衣よ摺つ、
春ハ、山鳥のなが〳〵し、ひねもす、
夏ハ、ほとゝぎす、明易きよすがら、
花よ月よねを忍ひし男女よゆかり、
今ハ世を何のゑら紙よをり出し、
都下百万文壇よ錦の朱を奪ふとぞ云ふ、
一本よ千金のねあり江戸紫、

春の舍主人

霞のそこゝ鐘おもる春の夕ぐれゝ咲花の、
思へばぞ、
おもへばひぢ枕、
世ゝ一炊の夢ゝやあるらん、
昨日の花ゝ根ゝかへりぬ、
今日の花よく幾許の盛をゝ保つ、
得られじな蓬萊が島の靈藥を、
得られねばこそ、
散ればぞ、

散ればこそあれ、
花を愛たきものゝ見るらめ、
人生不得恒少年、惜むなよ君、酒を沽ふの錢、
醉へ、
醉てなげうてよ、花を縫ふ其のふんでを、
聞け、青葉を囀むうぐひすの聲調へるを、調
ひし法法華經の聲ゝ、
如かじ、如かじな、惜まれし昔の春の花のう
ちの、朧げなりし其の姿の優しかりしゝ、請
君有錢向酒家、名ゝし負ふて逍遥なれば、君
不見蜀葵花、

さりや、我ゝ歌あり」

霞みゝし梢い何日かあを葉して

花ゝいとひし風なつのしき哉、

竹の舍主人

いさゝむら竹、庭ゝそよぎて、

風待つほどの夏のゆふぐれ、

絲呼ぶこゑゝ樽をながめつ、

日も此君の無てやいあらめ、

又

花咲むそれ、さけとしやれて、

足らぬを樽の底までわすれ、

そよや浮世を猪口と悟らい、

きみが谷、神い何も無からめ、

又

醉へりやと問へい未だしと笑ひ、

笑へりやと問へい未だしと醉ふ、

今の世の死醉候、

酒あらば夜一夜、日も足らす、

唯、ねぬなてのぬらり〳〵、

去れ、我い尾を泥中ゝ曳かんとぞ云ふ、

其の藏六よ〳〵、

劒菱の實ゝ腹を破りそ、

鷗外漁史

ちろきゐ雪の、雪のごと、
照る月影の、池の面ゝ、
觀すこゝろゐ、言さやぐ、
日耳曼の國ゆ、持てきゝ、
其の葦蟹の、よこゝ這ふ、
真竹のながね、爰ゝうつし
こゝゝ移して、益良夫か、
修羅の巷、ゝたなまくる、

衣のたての、縦文字と、
なしゝけるかも、君が抑も、
何をちぬびの、河の瀬ゝ、
うちも打たる、志我良美を、
命と蹇ちて、寄りよれる、
其の花片の、いろ〳〵を、
足搔き喙喰み、たてふれつ、
心の餘所ゝ、身を措きて、
浪のまゝ〳〵、世と遊ぶ、
其の世と遊ぶ、たのしみゐ、
小夜更て、〳〵、

柳ねふりし空を高み、
空をたかみて、鳴と云ふ、
かまめの外ハ、知るよしあらじ、

古蒼樓主人

さゝんか(山茶花)と云ふ、花なりと思へば、
松の葉ばりで此の世の中を、
さゝんかと云ふ、酒なりとおもへハ、
松の葉ばりで此の世の中を、」
(自注君れこぼれ松葉の集あり又濁世の如き小説多く有むせ)
させ、刺もよし蜂のごと、

させ、挿もよし柳のごと、
左れど、
緑遊のうら〳〵と立つ小柴垣、
霞ま醉へる春のあけぼの、
蜜、釀る爲め花なねふりそ、
根も無きものゝ葉なしげらせそ、
ねふるもよし舌鼓打ちて、
しげらすもよし培養て、」
左れど、
見地あやしく箴をな研きそ、」
搔けよ總角、

こゞれ松葉に箴はありとも、
よし、箴はありとも、
其の箴をこそ命なるらめ、」

靈魂

手にむすぶ水にやどりし、月影や、
よどみに浮ぶ、うたかたの、
有かの無かの、世にぞ住む、
吾人々の、はかなさは、
あらし待間の、夜さくらや、
散らで過べき、身ならねど、

苦しき海の、淵瀬にて、
浮きつ沈みつ、蜑小舟、
たま藻苅るとも何かせん、
さは去りながら、あぐらたに、
斯世にうまれ、来しうへは、
世にふさはしき、なりたひの、
道をまもりて、ひたすらに、
意馬のくるひを、つなぎとめ、
喜怒哀樂を、平らかに、
はかりの如く、秤のごとく、
其の秤にかけて、實相の、

心の鏡研ぎすまし、
よもあも草の、くさ〳〵よ、
うつる姿を、あやまたづ、
執着輪廻、せぬとさい、
織土も其のまゝ、極樂ぞ、
心佛衆生、無差別ぞ、
かゝるたのしき其の道の、
まつげの下よあるも猶ほ、
ゆめよも知らじ、悟らぞよ、
利慾よおぶれ、名の爲よ、
修羅のちまたよ、あらそふい、

阿鼻焦熱の、地獄ぞと、
雪の山人、たふとくも、
權よ因果を、蓮の絲、
ひき說かれたる、法の門、
彌陀の御國と、說かれしも、
心をたねの、おしへぞと、
識るやしら雲、ふみ分けて、
山よ入る人、やまよても、
あきらめ無し、其の時い、
何處よ行きて何かをる、
西や東の、國々よ、

教のかづゐ、品あれど、
みな真心を、種として、
あしきことをば、遠ざくる、
其のてだてとぞ、知られける、
あだし教の、みのりとて、
いまゝ傳ふる、其の中ゝ、
孔子をのぞく、其の外ゐ、
皆こと〳〵く、吾人の、
みたまの説を、立てられき、
すべて斯世ゝ、吾人の、
みさまの説を、立てさるは、

三千四千歳の、前の世ゝ、
人のおゝろの、くらくして、
燈火の無き、其の世ゝゐ、
父をも知らぎ、子も分ず、
仁義の道ゐ、更ゝ無く、
鳥やけものと、むれ居して、
只、かさくおゝ、いと強く、
つよき人のみ、富みさうえ、
弱きものこそ、あゐれゝも、
虐げられつ、棄てられつ、
姥捨山ゐ、今ゐさぐ、

名のみなれども、其の昔、
かゝりし事の、ありしかも、
夫を救いんが、其のさめまゝ、
かしおき人の世ゝ出て、
人の人さる、斯道を、
立てられしかど、如何ゝせん、
おろかお民等、うけがいで、
あしき草のみ、日ゝましゝ、
蔓りゆきて、今いはや、
八重の敏鎌を、ふるふても、
薙しがさかる、ありさまゝ、

一しほ心を、いさめられ、
たとへゝ道を、かりそめの、
むくろの失せし、其のあとゝ、
罪のかづ〳〵、むくひ来て、
みさまい獨り、くるしみを、
受るものぞと、說かれしが、
人を導びく、もとゝして、
染めはじめさる、白絲や、
みだれを愛ゝ、おさめつゝ、
かさくお人を、手引させし、
ささがけとこそ、知られける、

吾はらからの、おとゞひよ、
吾はらからの、おとゞひね、
いまだねふりの、さめやらで、
權の教まさまよふか、
如何ほど說を、たくむとも、
天と唱ふる、天も無く、
地と稱へさる、地もあらじ、
むくろの失せし、其のあとま、
魂魄のみのある、わけあらじ、
よし殘るとも、何かせん、
世界のひらけ、そめしより、

三千四千歲まで、ふりぬれど、
死せまし人の、日數へて、
まさよみがへり、世まいでゝ、
魂魄の中なる、ありさまを、
說かれしことも、聞ざれば、
因果三世の、おとはりも、
死せましあとま、あらぎして、
現世のことゝ、知れよかし、
少しまおびの、才あるね、
たゝへの文の、おもしろく、
とくるまま〳〵、おぼれそめ、

深き旨をば、あやまりて、
みづから心ゝ得たりとし、
己が所説ゝ、忤ふゝ、
舌の刃ゝ、斬りさふし、
ひさふる人を、惑はして、
真の道と、おもふなる、
人を救ゐん、其の爲ゝ、
立ておかれたる、其の道を、
ゆがみし道ゝ、悟らるゝ、
人の心ゐ、己ゝはや、
まよひの中ゝ、まよへるぞ、

迷ふなと説く、其の人が、
己ゝまよへば、夫をきいて、
悟らるゝ人、またまよふ、
迷へる上ゝ、いやまよひ、
影ゝほえたる門の犬、
一度啼けば、其の聲ゝ、
共吠をるゝことならじ、
世ゐとこやみと、なるぞかし、
日ゝをゝみ、月ゝひらくる、大御代ゝ、
生れ逢ひたる、われ〳〵ゐ、
三千四千歳も、前の世ゝ、

かさくゐ人を、導きし、
權の教の、かづ〳〵ゝ、
まよゝせられし、迷ゝしと、
思ひ居れども、如何ゝせん、
浮世ゝひろく、人多し、
くしき教ゝ、迷ゝされ、
吾と我身で、わが智恵の、
光をおほふ、おれ者の、
若しやゝあると、藻汐草、
かきつくされぬ、貝多羅の、
其のちり〳〵の、そのゐかの、

一ひらを爰ゝ、釋くものならじ、

出放題

きのふゝ過ぎぬ、明日ゝ未だし、
君ゝ若し、
肉あらば、食ゝせ給へや、
君ゝ若し
酒あらば、飲ませ給へや、
世の中ゝ、
今日の外、唯現在の今日の外、
明日も明後日も無きものを、

あらば其に、あだなる名のみ、
あらば其に、むなしき名のみ、
唯おもしろきものなるを、
世の中に、
其おもしろきものとてに、
唯現在の今日のほか、
明日も明後日も無ものを」
我酒瓶よあり、飲めや人、
我琴棚よあり、彈けや人、
醉にぐ我、其醉の國よ住み、
彈かば我、其聲の國よ住み、

住まば我、其醉となり、
住まば我、其聲となり、
其醉の、我なるか、
其我の、醉なるか、
其聲の、我なるか、
其我の、聲なるか、
彼もなく、又我も無き其時に、
夢と見て夢ならじ、
夢ならば其の夢に、
誰も云ふ夢ならで、
夢ならぬ夢ならめ、

夢アヽ夢なるかな、
夢なるかな」
醒めたりと云ふ其人の醉へるに、
醉へりと云ふ其人の醒たるが如、
是を説かば、非中是あり、
非を説かば、是中非あり、
我馬をもて彼馬を説かんより、
彼馬をもて彼馬を説け、
彼指をもて我指を説かんより、
我指をもて我指を説け、
世の中に、唯一指なるをや、

世の中に、唯一馬なるをや」
君見ずや、
天地に笛なるぞ、唯大きなる笛なるぞ、
吹くに抑も何者ぞ、
見えねどもかたちとて、
唯明らかに見えねども、
春来れば、花うるはしく、
秋去れば、雪おもしろし、
進むとに如何なるを退くと見て
進むなるか、其に能も得知らねど、
進むと云ふ世の中に

進むと云ふ世の人の、
夏暑く冬さふしとぞ云ふ、
其道理は合點ど、
肯へど、
おしひろめ、押詰むれば、
世の中は、唯一指なるをや、
世の中は、唯一馬なるをや」
天地は笛なるぞ、唯大きなる笛なるぞ、
吹くは抑も何者ぞ、
何者とは得知れねど、
絲よあたれば絲よ、

竹よあたれば竹よ、
金よあたれば金よ、
石よあたれば石よ、
山よ、
河よ、
海よ、
數へても數へつくせぬ其ものは、
吹きゝたり吹きあたる其かぜは、
其音は、
幾千萬と數へても數へ盡せぬが如、
世のおかの差別とし云へるものを、

是非とも云へるものを、
差別して數へなば、
其を數へつくせぬがごと、
又數へつくされじ」
ふりかへれば、我年ゝ、
かぞふれば、我としゝ、
四五千年ゴやなりぬ覽、
進みきたりぬ、我知慧ゝ、
殖てきたりぬ、我知慧ゝ、
進みきたればこそ、
ふえきたればこそ、

名も無きゴ名をつけて、
理學、哲學、猫、杓子、
アハヽ、アッ、ハッ、ハ、
我知慧ゝ凄まじ、
わが知慧えらし、
それでこそ理學、哲學、猫、杓子、
唯いろ〳〵ゴ名を附て、
底無き穴ゴよつ這ひて、
頭ゝ、蜘蛛の圍ゴ、
顔ゝ、かゝほりゴ、
息もたへ〳〵迷ふ人、

あれ〳〵、アナあれ」
見来れば、我身世ゝ出でゝ、
白絲の有無をだゝ知らぬ、
えぞ知らぬ、まだ幼び頃より、
今ゝ頭ゝ霜ふりて、
アハヽ、アッ、ハッ、ハ、
まだ霜などゝ降らねども、
四五千年の今日が日まで、
石ゝ石、花ゝ花、竹ゝ竹、
花が石ゝも咲きゝせじ、
竹が花ゝもなりゝせじ、

わからぬものゝ詮索を、
分らぬものゝ爲るとゝ、
アハヽ、アッ、ハッ、ハ、
唯笑へ、笑ふて遊べ、
唯現在の今日の外、世の中ゝ、
明日も明後日も無きものを、
止れや蝶々、菜の葉へ止れ、
菜の葉があいたら、
よしの先きへ止れ、
止まるところを忘れなば、

猫に追はれし蝶々の、
荘子は夢にうなされやせん、

旅鳥

ふところ淋しき旅なれば、
むやみに先のみ急がれて、
一里も前途へ近かれと、
勞れし足をばがまんして、
向ふの宿へといそぎつゝ、
お日さま山邊に落ぬうち、
此の松原をとあせれども、

あらじに喰れし足おもく、
並木のなからに日は暮て、
夕月こだかくひんがしの、
はるかの峯をば飛び離れ、
見渡す限りのやまゝは、
次第にをそ濃く靄籠めて、
暮れたり〳〵急ぐとも、
今はた何にも甲斐は無し、
脚袢の紐でもゆるめをし、
ゆるりと宿まで歩まんと、
おもふて倒れし松の木に、

腰打懸けんとするはづみ、
草鞋のまへつぼ蹈切りぬ、
これゐと攣めた其の顔の、
若しやゐ可笑ありつらめ、
後よりつゞきて落葉搔く、
熊手を肩げて来かゝりし、
田舎のむすめゑ笑はれぬ、
よき機なれゞと呼留めて、
ゆくての里數をうら問ゞ、
顔をゞあかめて口籠りつ、
返辭も爲し得でむたゝと、

ほこりを蹴立て行き過ぬ
折から浮雲むら〳〵と
月をゞかくして暗けれゞ
日頃ゐにッくき鳥なれど
今宵ゐ折ゑやふれぬらん
鳴くむら鳥もあてれなり

須磨の月夜

波さへも、
煙りゑ音をつゝまれし、
風無き夜半の須磨の浦、

松のひぐさも静やぎて、
見渡す沖まひとつぼし、
なさけを知らぬ海面ゐ、
次第まひかりを呑初て、
いまゐをがたも熾々まと、
眼を屢叩き打ちわびぬ、
其のありさまを譬ふれば、
壽永のむかし、平ぞくが、
都をおのびしほたれて、
浪のゆら〳〵世の中を、
棚無し小舟と啣ちたる、

女官の風姿もまの當り、
斯くやと思ふをり柄まと、
ちぎれ〳〵の雲間より、
真白まおつる月のかげ、
淋しき様を見るまつけ、
思ひ出るゐ其のむかし、
松を吹く磯風黒み、
海を吹くまつ風くろみ、
浪のおと、
血烟り立てゝ打ち寄し、
平家の武士が討ち死の、

潮ま洒落たる死骸をば、
照し来りしひかりかと、
思へばそぞろ恐毛立ち、
其のまゝ其處ま躇めば、
何まさわげるむら千鳥、
撥と立しもあてれなり、

李白が菩薩蠻の意を譯す

見渡せばいづこを端とゆふ煙、千里を籠めて
空遠く、はるかま霞むあの山い、エくあの山い
故郷をへだての關なるか、關と思へば志かを

がま、憂きをいくらか慰さむま、今い其れさへ
かき暮れて、あたり淋しく日い暮れぬ」
エくもう今日い暮れたかと、志よんぼりと立
つ段階を、かすめてさわぐむら烏、おまへの塒
い近うてよいが、我等が國への街道い此の村
はづれ彼の宿を」

おなじく柳永が卜算子慢を

江を渡る風も次第ま老ひゆけば、蓮の枯葉の
がさごそと、思へば旅のかなしさい、暮れ行く
秋の空遠く、斷えてい續く夕ばえの、中よりひ

ぐく里砧」胸をうたれて、打れてむねを、昨日い
なげき今日いまた、人をうらみのます鏡、うつ
せびなどか萬重の、海山水を隔つとも、うつら
んこといよもあらじ我此の思ひ」折しもさつ
と村時雨、川霧くらく立籠めて、心ばかりいふ
るさとの、我家の庭のつまをり戸、ひらくまお
そし雲晴れて、望みい絶えぬ眸の、つぐく限り
い山また山」エゝつらゝくやあの雁の、文ひろ
げつゝ鳴連れて、むつましさうゝ飛来るい、何
處の誰へ音づれぞ、爰ゝこうした我居るゝ、

原作者の名を失す　二首

深ゆくそらゝ只一人、星をかぞへて千鳥足、そ
よりそよ〳〵吹きまわす、風ひいやりと家近
く、歸り来りし心、地よさ、何時ねふりしか知ら
ぬ間ゝ、目さめて見れば枕頭、香のけふりのす
ぐよかゝ、亂れぬ鬢の薄化粧、よこめゝそれと
醉覺の、罐子の水ゝ舌つぐみ、うつゝか夢か、あ
ッはッはッ、何の浮世い五十年、

○

君を思ひのゆめ破れ、ねがへり打てばあやゝ
くゝ、屏風ゝ殘る筆のあと、うつゝゝ見しい是

かやと、ふツと目さめる耳、近く、月を摩すりて
聲さへも、血ゟむせびゆく時鳥、不仕合なる情
郎ハ今、いづくの端ゟ此鳥を、同じおもひゟ音
を忍び、嘆いて居らるゝ事やらと、つぼめる蓮
のふくよかゟ、匂ふ腮を二線ゟ、いろどり殘す
此のうらみ、あつき涙ぞやるせなや、

○

米僊子の西京ゟ行れしと聞き想、鴨河
納涼ゟ走せて
暮れて行く柳おぼろの川べりを、隈どるもや

の濃く淡く、れのづからなる風が、ふで今いろ
どりの其の最中ゟ、響瀏喨、抑も誰家ぞ、見上ぐ
れば伊豫簾のそとゟ釣燈籠、波おばしまゟ打
寄せて、笛の音あをし鴨の夕涼、明石も須磨も
よそならぬぞへ、

浦のとまや

うらのとまやの曙ゆかし
しろく鷗をそめぬいて、
浦の苫屋のあけぼの床し
そなれ松風さつ〳〵と、

うらのとまやの曙ゆかし
ほそく幽まあけのかね、
浦の苫屋のあけぼの床し
なみを彩るあさひかげ、
うらのとまやの曙ゆかし
松を波越をおとさえて、
浦の苫屋のあけぼの床し
ちらりちらりと漁火が、
うらのとまやの曙ゆかし
光りしらけし月ひとつ

終

新體梅花詩集

梅花詩集跋

世の憂さまゝ代へたる山の淋しさを問いぬゞ人のおさけおりけると參學の輩訪ひ来りける時まゝ其昔鴨の長明がをねた事いふたりし濃洲虎溪まゝ、去夏君か引籠られし折い、あゝ口惜し血氣さかりの身をもつて君も亦古来のへちま風流のよがれまゝ醉ひ、松籟泉聲を小夜の寝ざめの伽とをるおんどいふゑせ隠者の仲間まゝ入られしかと、そゞろまゝ悲しみしか、我か

おもひの外ゑ君い出て、野分さつ頃躊々
然として我庵ゑ来られ、山寺の味噌汁別
ゑ變つた味もおぼえねい左程都外ゑ居
りさくもおきまゝ唯是だけを旅のみや
げゑぶらりと歸りしと投出されしい此
詩集かりし、今此詩集の出版ゑつきて、机
上の考別ゑ面白い跋も出来ねばと唯其
まゝを記して梅花君の需めゑ應ずるも
のい

谷中村の

露伴

	正	誤
二頁五行目	捧もかない	がなの誤り
四頁一行目	ならしい	じの誤り
十四頁五行目	我い	我の誤り
廿三頁五行目	ふつふかれい	ぶかれの誤り
四十八頁五行目	ねかい	根かの誤り
五十頁十行目	廣い	廣の誤脱
五十二頁四行目	掏い	掏の誤り
六十三頁四、五行目	問へいい	ばの誤り
六十七頁十行目	研きそい	ぎその誤り
七十頁九行目	知らじい	むの誤り
九十頁四行目	幼ひ頃よりの	ひい衍
跋六行目	風流のよかれい	なかれの誤り

明治二十四年三月九日印刷
明治二十四年三月十日出版

正價金貳拾錢

版權所有

著者　中西幹男　東京淺草區千束村五百十六番地

發行兼印刷者　大橋新太郎　東京日本橋區本石町三丁目十六番地

發行書肆　東京日本橋區本石町三丁目　博文館

必昇社印行

第一高等中學校教授小中村義象
第一高等中學校教授落合直文 兩先生著

挿繪揮毫
松本楓湖先生

家庭教育 歴史讀本

○正價金十二錢○六冊前金六十七錢○十二冊前金一圓二十五錢○郵稅一冊四錢

毎月壹回發兌
毎卷記事讀切
和裝美本仕立
彩色密畫挿入

第壹編目次（二月廿日發兌）

第二編目次（三月發兌）

如意輪堂（楠正行公ノ事蹟）泉岳寺（赤穗義士復仇事蹟）二編讀切

能褒野の露（日本武尊の御事蹟）

裾野の嵐（曽我兄弟復讐の事蹟）

讀切完結

少年ノ教育、豈止ダ學校ノミニ止マランヤ、忠烈孝義ノ情實ニ家庭ノ感化ニ育ヲ資スルヲ以テ精神トシ、落合、小中村ノ両先生ノ嘗テ編述シ置カレシモノヲ、今回弊舘乞ヒ受ケテ月コトニ發行シ、過般發布ノ家庭教御主意ヲ奉戴シ一層忠孝彝倫ノ道ヲ正シ、國民ノ元氣ヲ感發セシメントス、二先生ガ當代文學ノ大家タルハ世既ニ公評アリ、其記事文ノ壯快ニ優美ニ精密ナル世人ノ既ニ知ル所ナリ、故ニ此ノ書ヲ讀ムモノハ、忠烈孝義ノ念ヲ養フト同時ニ兼テ文ヲ學ブノ好師ヲ得ベシ、世ノ愛兒令孫ヲ有スル方ハ勿論、苟クモ道ト文トニ志ス少年諸君ハ請フ愛讀アレ

勅語ノ